

志水宏吉著「学力を育てる」を読む

- 子どもたちをエンパワーする学びの場を考える -

人をエンパワーする学校

「力のある学校」とは、英語に置き換えるなら、“empowering school”ということになるだろう。すなわち、「子どもたちをエンパワーする学校」が、「力のある学校」である。強調しておきたいことは、学校がエンパワーするのはまず子どもなのだが、同時にそこでは、そこにかかわる大人たちもエンパワーされているに違いないということである。ここでの大人とは、まず教師であり、親であり、そして地域の人々である。子どもが元気になる学校は、教師や親や地域の人々も元気になれる学校である。

では具体的に、「力のある学校」をつくるには、どのようなことを心がければよいのか。

学校づくりのプロセスは次のように表現できる。

まず、「基礎」を構成するのが、「教師集団のチームワーク」である。「力のある学校」の「基礎」は、ビクともしない盤石の重みと安定感を有している。逆に、教師たちが孤立し、相互の連携がとれない学校があるとすれば、それは、建物の「基礎」自体がぐらついている欠陥住宅であると言ってよいだろう。そのような学校で、効果のある取り組みがなしうるとは到底思えない。

次に、「骨組み」を構成するのが、「集団づくり」の原理である。言葉を換えるなら、子どもたち同士の関係の質である。E小やU中では、檜の木のようにしなやかで、かつ軽量鉄骨のように強靱(きょうじん)な骨組みが備わっているように見える。対照的に、ちょっと押すとバラバラと壊れてしまいそうな接ぎ木的な骨組みは、個人主義的な雰囲気や充満する学校に見られる可能性が高い。また、古いマンションの重たい鉄骨のような融通性に欠く骨組みは、高圧的な管理主義が横行している学校で見つけ出すことができよう。いずれも、「力のある学校」にはほど遠いものである。

どのような種類の建物でも、「一階」部分に相当するのが、「基礎学力の保障」のフロアということができるだろう。およそ学校と名のつくものならば、どの学校でもこのフロアを持たなければならない。そして、「二階」以上の部分に相当するのが、「総合学習」や「情報教育」等に代表されるような、「応用的学習の展開」である。この二階以上の部分については、各校が独自性を発揮して、その学校らしい魅力的なフロアをつくっていけばよいと思う。

「力のある学校」に、決まった形や規格があるわけではない。「力のある学校」の中身は、そこに関わる人々の情熱と創意工夫にかかっているのである。

P.172 ~ 174

志水宏吉著「学力を育てる」岩波新書、岩波書店 2005年11月18日刊

- 2006年10月2日記 -